

旧盛岡城内神社の変遷

2回生 大賀智就

I. はじめに

盛岡は盛岡城築城以前には不来方という地名であり、奥羽山脈の東で内陸の北上盆地に位置する。北東北を治めていた 26 代南部家当主信直公が 1590 年の豊臣秀吉による小田原征伐に参陣し、同年の奥羽仕置で信直公は秀吉から現在の青森・秋田・岩手 3 県の一部とされる南部内七郡を安堵された。結果、元の領土と比べて北部は縮小したものの南部は拡大し、不来方は位置的に南部領の中心となった。加えて、不来方は広大な穀倉地帯である北上平野に立地し、北上川、中津川、雫石川が合流する要害な地形である。奥羽仕置の帰路の途中に豊臣政権の政務を担う五奉行の一人であった浅野長政から信直公に不来方へ居城を移すことを勧められ、居城を不来方に移し盛岡に改称した。

盛岡城は明治維新まで南部家が居城とし、城下町やその町民らを庇護していた。戊辰戦争の際に盛岡藩は旧幕府側として敗れて盛岡城が廃城となるが、戦火は免れたので城下町としての町割が今なお残っている。また、近世の城下図が多く現存していることもあり、地理学として格好の研究対象である。現に梅林・阿部（1981）が盛岡の市街地の変遷について、菅野・沖津・佐藤（2017）が建築学の観点から盛岡を南部家の城下町の 1 例として信仰と空間構成について研究を行っている。しかし、藩政期に盛岡城内に鎮座し城内でのみ厚く信仰されていた旧盛岡城内神社が、改称や盛岡内外への遷座、廃社・再建などが起こり現在の盛岡で信仰を得ているもののあまり歴史地理学の面で研究されていない。

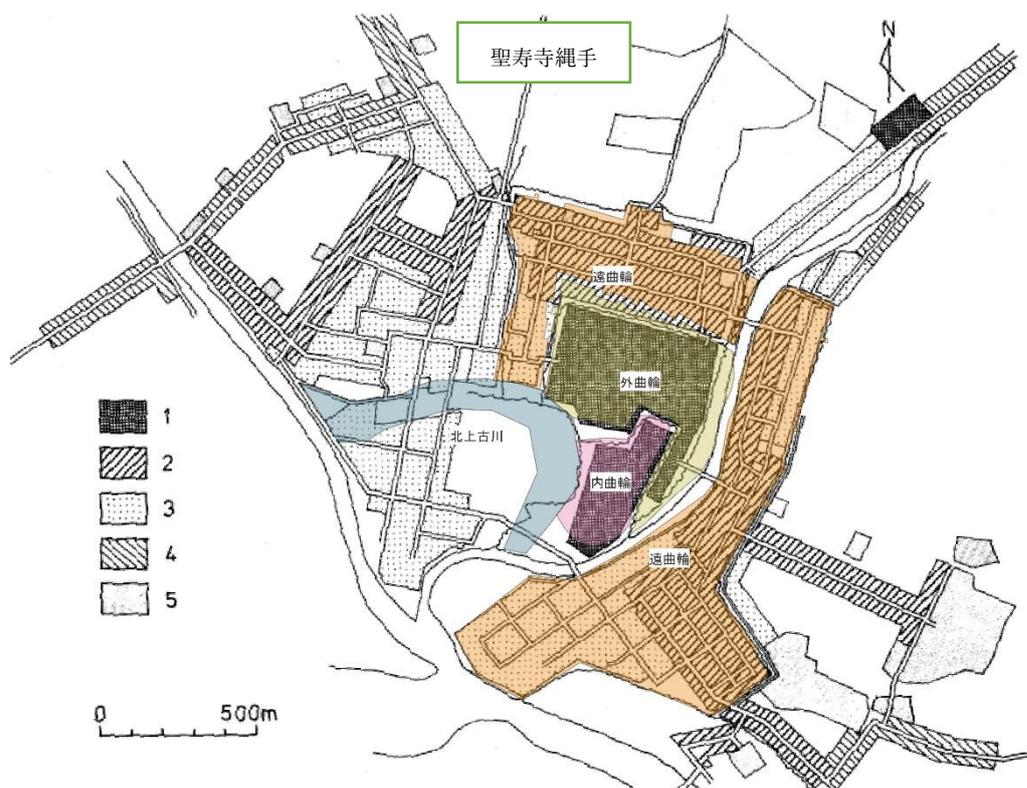
そこで本稿では、旧盛岡城内神社について古地図・絵図や南部叢書に収録されている江戸後期から明治初期に記された盛岡の地誌書である『盛岡砂子』などの文献を用いて考察していく。

II. 盛岡城とその城下町について

「I. はじめに」でも述べた通り、信直公は浅野長政に助言されたことをきっかけに三戸から盛岡へ居城を移した。森（1974）は盛岡城築城期に三戸から建材を運ぶ際「旧奥羽街道から上田の堤の上を通り聖寿寺前を出、そこから城に入るためにまず聖寿寺前から睨を作り、三戸町を造り日影門を造り、京町（本町）から大手門に入る道路が造られた」とし、梅林・阿部（1981）は「築城当初の盛岡城にとっては、北方の三戸との交通が最も重要」とし、この聖寿寺縄手が町割の基線となったことで盛岡城下の町割の南北方向の街路は東偏約 20° の直線路として建設されたとしている。

盛岡城下町のもう 1 つの大きな特徴として、城郭外も高さをつけ曲輪を作る惣構え構造が挙げられる。盛岡城を囲った内堀の中である内曲輪、その北から東側に内堀を隔てて外曲輪が作られ、更にその外側と中津川を隔てた向かい側に遠曲輪が作られた。また、現在

は埋め立てられているが、盛岡城の西から南にかけて堀が敷かれ、西は現在埋め立てられている北上古川や北西から南に流れる北上川、北東から北上川に合流する中津川の3本の川を堀の一部として用いていた。(第1図)

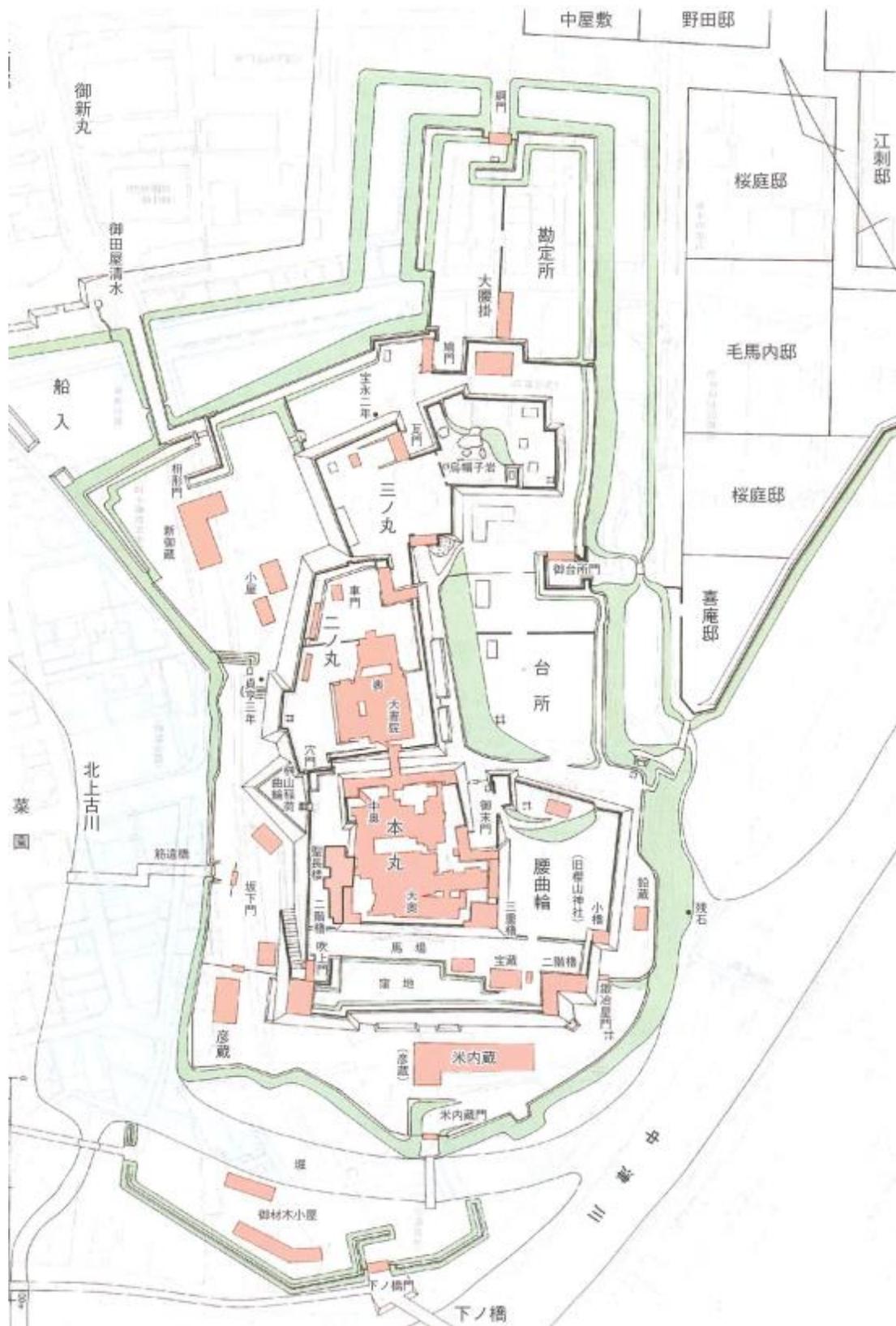


第1図 江戸後期盛岡の市街地形態と惣構え構造

1. 城・御用屋敷 2. 町屋 3. 諸士屋敷 4. 足軽・同心屋敷 5. 寺院・神社
(梅林・阿部(1981)第2図を転載し、盛岡市教育委員会(2016)第2図を用いて加筆)

内曲輪と外曲輪にはそれぞれ城郭と上級武家屋敷、遠曲輪は町人町が分布し、その外に諸士屋敷・同心組屋敷が位置する。惣構え構造の中に諸士屋敷ではなく町屋を置いている点で、梅林・阿部(1981)は他の惣構え構造を持つ城下町と比べ盛岡が町屋を重視した城下構造としている。

盛岡城内は中央に本丸、その北側に二ノ丸が位置し、更に二ノ丸の北側に三ノ丸、その東側に鳩森曲輪が隣接する。二ノ丸の西側に低く台所が、本丸より低く淡路丸曲輪とも呼ばれる腰曲輪が隣接して作られ、腰曲輪の西側には榊山稲荷曲輪が位置した。鳩森曲輪には鳩森八幡が、台所には鹿嶋大明神が、腰曲輪の東には淡路丸大明神が、榊山稲荷曲輪には名の通り榊山稲荷が鎮座していた。(第2図)



第2図 盛岡城建物配置復元図
 (盛岡市教育委員会 (2016) 第3図を転載)

III. 旧盛岡城内神社について

『盛岡砂子』によると藩政期に盛岡城内には淡路丸大明神・榊山稲荷大明神・鳩森八幡（『盛岡砂子』には八幡宮社と記載）・鹿嶋大明神の少なくとも4社が鎮座し、淡路丸大明神以外の3社は城外に御旅所が造営されていた。現在の旧盛岡城跡には淡路丸大明神が改称した櫻山神社のみ鎮座している。以下は現在盛岡に鎮座する3社の由緒や現在についての説明と、旧盛岡城内神社が現在鎮座している位置について（第3図）である。

1. 櫻山神社

櫻山神社によると、淡路丸大明神の創建は1749年で盛岡城の鎮守として盛岡藩初代藩主の信直公を勧請し、盛岡城廃城まで腰曲輪の東側に鎮座していた。1812年に11代盛岡藩主利敬公が櫻山神社と改称、廃城に際して城外の加賀野山、北山へと遷座し、1900年に盛岡城跡内に遷座され、現在に至っている。櫻山神社は現在南部家を興したとされる南部家初代当主光行公、盛岡の町を開拓した初代盛岡藩主信直公、盛岡城とその城下を整備した2代盛岡藩主利直公、藩学の礎を築いた11代盛岡藩主利敬公の4柱を祀っている。

2. もりおかかいうん神社

『盛岡砂子』によると、榊山稲荷大明神は心眼流剣術の元祖である宇治八兵衛の屋敷に勧請されたもので、築城の際堂が再興されたものとされる。榊山稲荷大明神は盛岡城廃城の際に廃社となったものの、南部家の土地であった北山の地にもりおかかいうん神社として再建したものである。なお、もりおかかいうん神社によると、もりおかかいうん神社という名は榊山稲荷神社を本社として境内に鎮座している神社の総称名である。

3. 盛岡八幡宮

盛岡八幡宮によると、南部家が居城を不来方に移す際、築城以前から不来方で祀られていた鳩森八幡社を修復した。また、1671年に南部家の総鎮守とされる三戸郷の榊引八幡宮を分祀し現在の盛岡八幡宮の位置に当たる東中野に御旅所として八幡社の建立に着手したとされる。文献などはないものの盛岡八幡宮に御神体が二つ存在することから、神輿渡御で城内の鳩森八幡宮と御神体を交換していた可能性があるとしていた。

4. 鹿嶋大明神社

『盛岡砂子』によると鹿嶋大明神社の御神体は南部家初代当主光行公が甲斐から移したもので、古くから南部家が信仰しているようである。1661年に南部家の公女吹姫が生まれた際南部家の氏神（『盛岡砂子』には氏子神と記載）とした。1662年に城東に御旅所を建立し神輿渡御を始め、1666年城内に台所を造営する際鳩森八幡社の境内に遷座となる。廃城後も御旅所で祀られ続けたが、10年ほど前にホテル建設にあたって盛岡天満宮の境内に移されたようである。

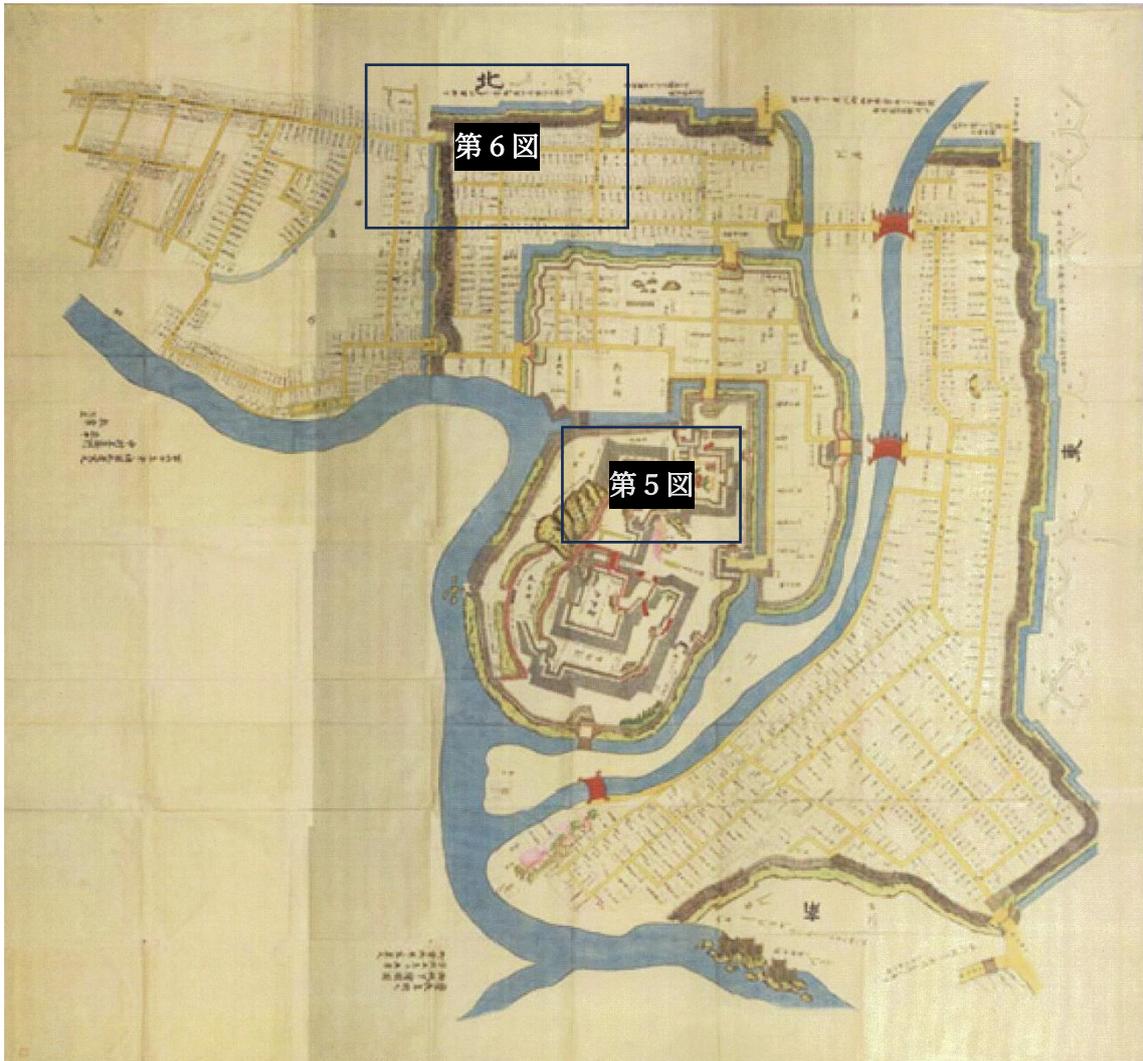


第3図 旧盛岡城内神社の現在の位置図

IV. 旧盛岡城内神社の変遷

『盛岡砂子』に記載が見える盛岡城内に鎮座していた神社の淡路丸大明神社（櫻山神社）・榑山大明神社・鳩森八幡社・鹿嶋大明神社は盛岡城が廃城となるまで城内に鎮座し続けた。その後、幕末から明治時代のはじめにかけての盛岡城廃城に際して盛岡城内神社は城外に遷座・廃社となっている。

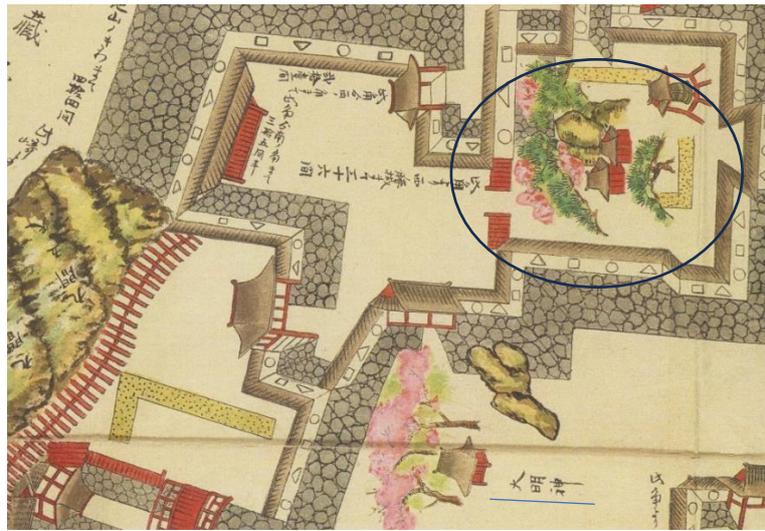
そこで、この章では時代の流れに沿って旧盛岡城内神社・御旅所の分布とそれに関わる盛岡城下町の変遷を地図・絵図や文献を用いて説明し、旧盛岡城内神社が当時の城下町に与えた影響について考察していく。



第4図 「慶長盛岡図」
(岩手県立図書館所蔵)

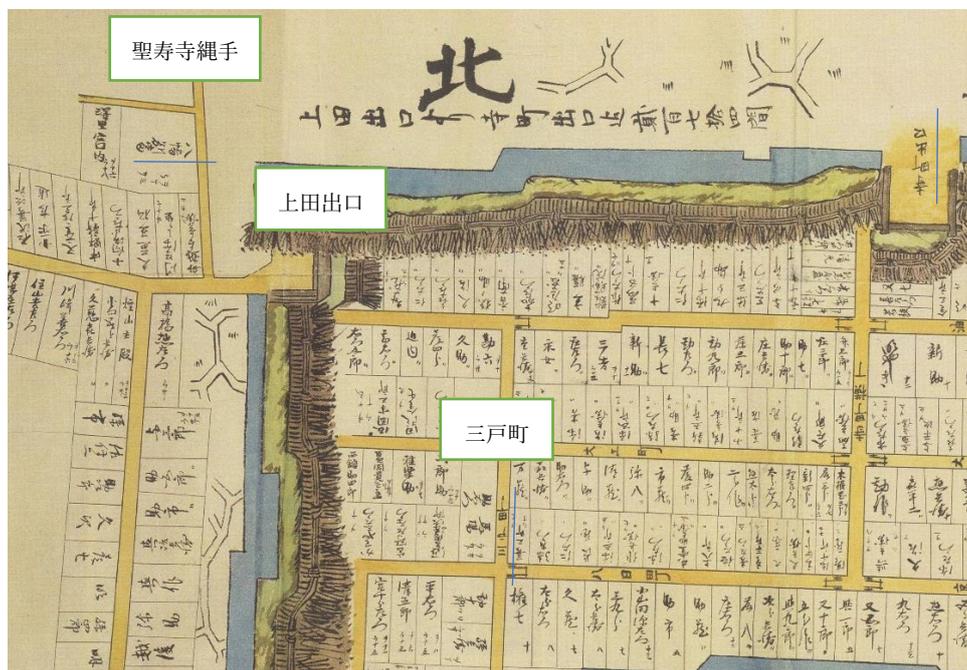
第4図「慶長盛岡図」は慶長年間（1596～1615）に作成されたとされる盛岡の城下町図の写しである。

この絵図では惣構え構造の曲輪と城北の遠曲輪の西に接する足軽・同心屋敷が記載されている。惣構え構造の内側に焦点を当てているので盛岡の町割が東に20度傾いているのを考慮しておらず、第4図の4辺が方角に対応しているわけではない。城内に鹿嶋大明神と鳩森八幡社が描かれ（第5図）、盛岡城の北に寺町出口と上田出口外の聖寿寺縄手入口に八幡別當が（第6図）記載されている。



第5図 「慶長盛岡図」盛岡城の北西部分を拡大

第5図では後の台所に大明神の字と建物が見えるが、これは鹿嶋大明神社だと思われる。また、三ノ丸東側の鳩森曲輪に大きな岩と建物が見えるが、この岩は磐座信仰によって祀られている烏帽子岩で建物は鳩森八幡社である。



第6図 「慶長盛岡図」の城北遠曲輪の外縁部を拡大

第6図では聖寿寺縄手入口に八幡別當の字が見える。『盛岡砂子』ではこの八幡別當(『盛岡砂子』では八幡屋敷と記載)を「三戸櫛引八幡別當、普門院屋敷也、昔の拜領地なるへし。」としている。「Ⅱ. 盛岡城とその城下町について」でも述べた通り、築城当初

の盛岡は旧藩都である三戸との交通を重視した町割となっており、「盛岡砂子」によるとこの図での三戸町は1617年に三戸市民を移住させた地である。櫛引八幡別当は旧三戸市民が櫛引八幡を拝めるように三戸町の近くに置かれたものと思われる。



第7図 「正保南部領盛岡平城絵図」
(国立公文書館所蔵)

第7図「正保南部領盛岡平城絵図」は正保元年（1644）に幕府が盛岡藩に作成を命じた城絵図である。この図では社寺に関する記載は見られないものの、第4図では見られなかった惣構え構造の外も記載されており、築城後の盛岡の街割りが分かる。曲輪の外は基本的に田が広がるものの、城北の聖寿寺繩手には屋敷が記され、「Ⅱ．盛岡城とその城下町について」で書いた築城期に三戸との交通を重視したという点が見て取れる。また、城北に愛宕山のみ山として記されていて、この絵図を南部家が作ったことから南部家の山岳信仰として愛宕山が篤く信仰されていたと思われる。



第8図 「寛延盛岡城下図」
(もりおか歴史文化館所蔵)

第8図「寛延盛岡城下図」は寛延2年（1749）の盛岡の城下町の景観を寛延年間（1748～1751）に記した図とされる。社寺は朱色で塗られている。

この図は第7図「正保南部領盛岡平城絵図」以前の図より惣構え構造の外を詳細に記載している。第7図と比較すると、北上川の流れを変えながら以前の古川を内堀とし、古川と北上川の内側に町が造られている。また、第7図では見られなかった新八幡宮を城内八幡宮社の御旅所として造営し、鳥居前町として八幡丁が整備されている。新八幡宮と同様に榊山稻荷大明神社、鹿嶋大明神社の御旅所も造営されている。一方、第4図では普門院の敷地を八幡屋敷と記載していたが、この図では普門院と記載されている。これは新八幡宮社（現在の盛岡八幡宮）に八幡別当を移したか、時の流れによって榊引八幡宮への信仰が薄れたかだと思われる。



第9図 「寛延盛岡城下図」盛岡城部分を拡大

第9図は第8図「寛延盛岡城下図」の御城部分を拡大したものである。

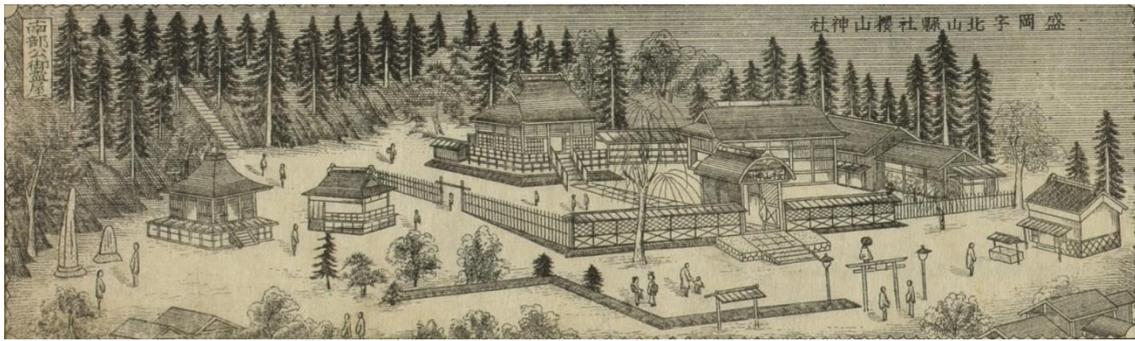
城内への入り口と城内の主要な神社が記載されている。この記載されている神社は八幡宮社、榊山稻荷大明神、淡路丸大明神の3社である。鹿嶋大明神社は台所造営の際八幡宮社と同じ鳩森曲輪に遷座されており、第6図以降の図には記載がない。



第10図 「寛延盛岡城下図」新八幡宮付近を拡大

第10図は第8図「寛延盛岡城下図」の新八幡宮付近を拡大したものである。

第7図にはなかった新八幡宮と東の遠曲輪の肴町から東に向かって伸び新八幡宮を繋ぐ八幡通りが記されている。また、第7図では城東の遠曲輪に沿って立地していた寺町がこの図では宮古街道方面に延びている。



第 11 図「盛岡実地明細図 北山期櫻山神社」

(岩手県立図書館所蔵)

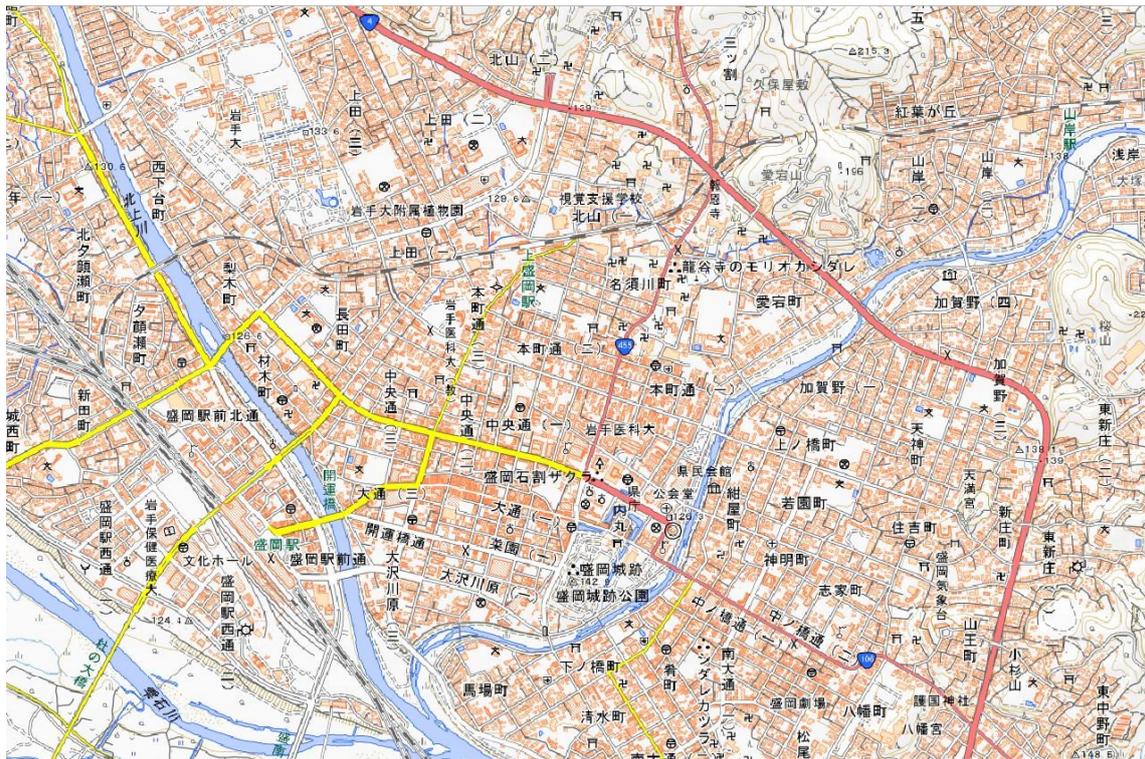
この図は明治の北山に鎮座していた頃に描かれた櫻山神社の絵である。明治維新の際、盛岡城は廃城となったので城内に鎮座していた神社も遷座や廃社となった。櫻山神社によると、櫻山神社は加賀野村妙泉寺山に仮遷座を行い、1877 年に北山へ再遷座が行われたようである。1900 年に縁故払い下げによって城内へ再遷座が行われるが、現在も北山の地が旧櫻山と呼ばれていることから櫻山神社が篤く信仰されていたことがわかる。この図の左 2 つの建物が南部家の祖先を祀る菩提寺の聖寿寺であり、聖寿寺の奥の階段を上ると南部家の代々の墓が置かれている。まん中から右の柵で囲われているのが櫻山神社である。現在は櫻山神社跡地を聖寿寺が管理しており、石鳥居と南部家納骨堂が残っている。また、現在櫻山神社跡地の北から東に隣接してもりおかかいうん神社が鎮座している。



第12図「明治四十四年測図大正五年製版盛岡図」

(国土交通省国土地理院所蔵)

この図は1911年に測図された盛岡の地図である。第8図「寛延盛岡城下図」と比較してもあまり宅地などに整備されていないことが分かる。一方、第8図には記載がなかった学校が多く記載されており、菜園跡に仁王農学校が、城跡から見て北西に高等農林学校が設置されている。また、鉄道が敷かれ城西に盛岡駅が設置されていることも見てとれる。旧盛岡城内には櫻山神社が鎮座しているのが見えるが、旧城は公園となっており、外曲輪には行政施設が立ち並んでいることから、南部家の統治が全く及んでいないことが分かる。八幡宮北の天満宮付近に旧城内神社の鹿嶋大明神社が鎮座していたが、この地図では描かれておらず、信仰が薄れていることが分かる。



第 13 図 現在の盛岡を描写している地理院地図

第 12 図と比較して、現在の盛岡は宅地化などで発展したと言える。第 12 図では八幡通りの南北や城北の寺町の東西などが田んぼだったが、現在は建物が立ち並んでいる。加えて、盛岡駅から東に JR 山田線が通ったことで聖寿寺縄手が第 12 図ではもりおかかいうん神社が描かれていなかったが、第 13 図では聖寿寺の東に隣接して描かれている。旧盛岡城内神社 4 社のうち、鹿嶋大明神社は盛岡天満宮内に遷座となり現在の盛岡を描いた地図ではまず描かれることはない。しかし、他の盛岡八幡宮、櫻山神社、もりおかかいうん神社の 3 社は現在でも盛岡での信仰が篤く、描かれていることが多い。

V. おわりに

ここまで、盛岡の城下町と特に盛岡城内神社 4 社の社寺の変遷について見てきた。櫻山神社は南部家の特に秀でた 4 柱を祀っており、菩提寺である聖寿寺敷地、旧盛岡城内と南部家にまつわる地に遷座していた。盛岡八幡宮、鹿嶋大明神社は明治維新後、旧御旅所に遷座している。榊山稲荷大明神社は廃社となったものの、初代宮司によって再興され、南部家菩提寺の聖寿寺に隣接して鎮座している。

以上から現在でも旧盛岡城内神社の盛岡八幡宮、櫻山神社、もりおかかいうん神社 3 社が篤く信仰されていることからわかる。櫻山神社の例大祭では現在の南部家当主が騎乗して盛岡の街を練り歩くそうである。現在の盛岡は岩手県の政治、経済など多様な面で中心となっている。まだ調査が足りないが、その盛岡を明治維新以前まで治めていた南部家が

現在でも盛岡に宗教面で影響を及ぼしていると言えるのではないだろうか。

—付記—

本稿を作成するにあたり、調査にご協力いただいた櫻山神社の坂本広行様、盛岡八幡宮の千葉浩之様、もりおかかいうん神社の荒川和昭様には聞き取り調査に手伝っていただき、お忙しい中にもかかわらず、大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

—参考文献—

- 南部叢書刊行会（代表者）太田孝太郎 1970, 『南部叢書（一）』、歴史図書社
森嘉兵衛 1974, 『みちのく文化論』、法政大学出版局
矢守一彦 1972, 『城下町研究ノート』, 古今書院
兼平賢治 2023, 『家から見る江戸大名 南部家 盛岡藩』、吉川弘文館
吉田義昭 及川和哉, 1983, 『図説盛岡四百年 上巻』、郷土文化研究会
梅林巖 阿部隆 1981, 『旧城下町盛岡の市街地形態の変化と都心地区の形成』
盛岡市教育委員会、2016. 3, 『史跡盛岡城跡—下曲輪土塁修復工事報告書—』
菅野圭祐 沖津龍太郎 佐藤滋 2017, 『南部一族の統治圏域における信仰対象と近世城下町の空間構成との関係に関する研究』
盛岡市公式サイト/盛岡城跡公園（岩手公園） （最終閲覧日 2024/01/31）
<https://www.city.morioka.iwate.jp/kurashi/midori/koen/1010491.html>

